



## ウィリアム・ジェームズ著 『情動の身体的基礎』

宇津木, 成介[訳]

---

**(Citation)**

近代, 99:1\*-28\*

**(Issue Date)**

2007-10

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81001558>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001558>



(翻訳)

## ウィリアム・ジェームズ著『情動の身体的基礎』

宇津木 成介 (訳)

### はじめに

以下は、ウィリアム・ジェームズ (William James, 1842-1910) の “The Physical Basis of Emotion” (1894年 Psychological Review 誌 1 巻, pp. 516-529) の全訳である。ジェームズは「悲しいから泣くのではない、泣くから悲しいのだ」という主張を “What is an emotion? (1884)” において行った。この主張は “The Principles of Psychology (1890)、“Psychology, the briefer course (1892)” においても繰り返された。この主張には批判があり、1894年に彼は批判に答える論文を書いた。それが以下に訳出した論文である。ジェームズは生理学者から心理学者となり、最終的には哲学者になった。つまりジェームズの思想は、非常に速いスピードで変化していったと考えてよいだろう。そのジェームズが、1884年の論文の相当部分をそのままのかたちで、6年後と8年後の2冊の心理学教科書の中に記述したことは奇妙に思われるが、これらの教科書はよく売れたようであり、それゆえ、1884年当時にはそれほど注意を引かなかったジェームズの情動理論は多くの人の目にとまって批判されることになり、結局ジェームズはそれらの批判に対して、何らかの回答をすることを余儀なくされたのであろう。その意味では、この1894年の論文はジェームズが「心理学者」として書いた最後の論文であると言えるかもしれない。

「泣くから悲しいのだ」というジェームズの主張は、ウスター博士が、ジェームズの理論によれば「食料を買いだめすると飢えに対する恐怖が生じ、低賃金で土掘りの仕事をすると貧乏への恐れが生じる」と批判するに及んで、「表現の仕方が悪かったかもしれない」とやや表現を和らげているが、末梢の変化が感情体験の本質だというジェームズの主張そのものは変化していない。その後のジェームズは心理学の理論にかかわる貢献はしていないようであるから、ジェームズの情動理論はこの1894年の論文が最終版ということになるだろう。なお、この論文は *Psychological Review* 100周年記念号 (Vol.101, No.2, pp.205-210, 1994) に再録されている。

本文のイタリック部分は日本語では下線部とした。引用符は「」で示した。訳語で原語表記が参考になると思われる部分は ( ) で原語を示した。訳出する際に日本語の文章として不自然になるところは随時 (訳補) として日本語を補った。

## Discussion

The Physical Basis of Emotion 1894 *Psychological Review* Vol.1, pp. 516-529

1884年にコペンハーゲンのランゲ教授と私とは、それぞれ独立に、情動の意識に関する同一の理論を発表した。この両者の理論によれば、情動の意識は、身体組織の変化 (organic change)、つまりいわゆる情動の「表出」を構成する筋肉と内臓の変化による効果 (effect) として生じるものである。したがって、情動の意識は、対象物や思考の刺激によって直接に喚起される第一次の感覚 (the primary feeling) ではなく、間接的に喚起される第二次の感覚 (the secondary feeling) である。第一次の効果とは、ここで問題とする身体組織の変化であり、対象が現れるとそれに対して直接に引き起こされる反射である。

この考え方はちょっと見ただけではパラドックスのようであるから、多くの

心理学者に信用してもらうことが難しかった。しかし新しい論評をいくつか付け加えることによって、この理論に興味をもつ読者を得ることができるかもしれない（訳注1）。

まずヴント教授の批判に言及するべきだろう<sup>（原脚注1）</sup>。彼はもっぱらランゲの論文に対して、厳しい批判を加えている。彼はランゲの説を、エセ心理学的説明（psychologischen Scheinerklärungen）、つまり心的事実は生理学基盤をよりどころとした場合のみ科学として満足の行くものとなるという考え方の一つであるとして、非難している。

この問題に関する彼自身の説明によれば、対象あるいは「いかなる意識内容に対しても生じる統覚（Apperception）<sup>（原脚注2）</sup>反応」の、直接的かつ第一次の結果が感覚（Gefühl）であるという（364）。感覚はこれ以上分析することのできない単純な過程であって、知性作用の領域における知覚（sensation）に、感性作用（Gemüth）の領域において対応するものである（359）。しかし感覚には諸観念（ideas）の方向性を変える力がある。その性質（nature）に従って、ある観念を抑制し、別の観念を引きつけるのである。そしてこれらの諸観念は次に二次的な感覚と身体組織の変化との両者を生み出す。この身体組織の変化は次に、付加的に官能的感覚（sinnliche Gefühle）を立ち上げるのだが、これがすでに生じている感覚（preceding ones）と融合合って、喚起

---

原脚注1：Philosophische Studien, VI. 349, (1891).

原脚注2：この論文中でヴントは、彼の「心理学」第4版においてもそうだったように、「統覚」の意味を途中から、はっきりとした説明なしに、根底から変えてしまう。そして連合主義の用語を用いて、新しい方の統覚に曖昧な説明をあたえる。「統覚は、表象内容において統覚が生み出す諸効果から切り離すことができない。実際、統覚はこれらの随伴物（concomitants）と諸効果からのみ成っている [ものごとがその随伴物から『成っている』というのだ!]」（中略）。個々の統覚行為においては、以前の意識生活のありとあらゆる内容が、ある意味ですべての力の統合（a sort of integral total force）として作用している」（364, 365）、等々。このような説明は純然たるヘルバルト主義となら変わるところがない。ヘルバルト主義においては、統覚は意識における古いものと新しいものとの相互作用に対してつけられた単なる名称にすぎず、感覚は、この相互作用の結果の一つである。

された感覚の大きさを強めるのである。このような複雑な過程全体が、ヴントの言うアフェクト、つまり情動であるが、これは一種の心の状態であり、彼自身が適切に表現しているように、「それ自身を強める力を持っている」(358-363)。このような説明における第一次の感覚がいったい何を意味しているのかについては、あとで述べることにしよう。結局の所ヴントは、それ（第一次の感覚：訳補）が情動の必須の部分であることを確信すると同時に、また、末梢からの流れ（currents）は、それ（第一次の感覚：訳補）と関連する身体組織における変化をあらわすもの（organic correlate）ではあり得ないと確信しているように見える。しかし私に言わせれば、仮にそれ（第一次の感覚：訳補）の存在を認めるとしても、それ（第一次の感覚：訳補）は情動それ自体であるためには足りない、なぜならそれ（第一次の感覚：訳補）には混乱（commotion）が含まれていないからであり、また、そのような末梢からの流れこそが（are）、その（第二次の感覚の?: 訳補）原因である、ということになる（訳注2）。しかしこれらの点についても後で述べることにしよう。ヴントによる批判の残りの部分はとるにたりないものである。ランゲの論文のやや性急な方法論的記述のみを議論のまことにしたり、心身の「並行論」を強調し、心の原因を身体に求めるのは思い上がりだと指摘するなど。まるでランゲが何か特別な意図があってわざとそうしたとも言える。しかし、ヴントの所見のうち、2つは具体的なものである。

ヴントが言うには、ランゲは血管運動の効果から諸情動を説明しているが、そうすると喜びと怒りが同類ということになってしまう、これではまるで説明になっていないというのである。私はヴントの批判、すなわち、ランゲは血管運動の要因に力点を置きすぎているという批判、また、顔面の充血が怒りに特有だということは全く間違っている、なぜならこの怒りという情動が最高潮に達すると、「激しい怒りに顔面が蒼白になる（white with rage）」という表現が示しているように、ほとんど誰でもが青ざめるからである、という批判の両

方に答えようと思う。ヴントは次いで、もしある刺激が単にその反射として情動表出を起こすのだとすれば、そしてその刺激とほとんど同一の他の刺激が情動反応を起こさないのだとすれば、それはその心的効果が同一でないからであろうと言う (355)。つまり情動を生成するためには、「対象」がなんであれ、心的動機付けが不可欠であるというのである。

この反論は、形を変えて、様々な批判論文に繰り返し現れてくる。「身体の効果を決定するものは対象それ自体ではない」とD. アイアンズ氏 (訳注4) が最近の論文<sup>(原脚注3)</sup>で述べているが、これがもう少しわかりやすく書いてあったならば、まちがいをなく効果的だろう。「身体の効果を決定するものは、その対象に対する主観的感覚以外にはない (中略)。一つの情動の類 (class) は客観的なものではない。それぞれの人はかなりの程度、この点に関しては、自分で分類をするのであり、さらにこの場合は、時や事情によっても変わり、不安定になる (中略)。恐れずに言えば、対象物は恐怖の対象ではない (p.84)。」また、W. L. ウスター博士 (訳注5) は、論文<sup>(原脚注4)</sup>の中で、わかりやすく、かつ効果的に、以下のように述べている。「恐怖によって走って逃げるということは、あるいは彼 (ジェームズ) が枚挙するいかなる他の徴候であっても、それはクマを見たことによる必然の結果ではない。鎖につながれた、あるいは檻に入れられたクマであれば、好奇心が現れるだけであろう。銃を持った猟師が森でクマに出会えば、快感を体験するだけであろう。だから、恐れ (身体：訳補) 運動を喚起するのはクマの知覚ではない。クマが我々の身体に危害を加えることができると考えるのでなければ、我々はクマから逃げたりはしない。例えば、クマに喰われるかもしれないという予想が、我々の足の筋肉を動かすのはいったい何故だろうか。おそらく「常識」は、喰われたくないから逃げる

---

原脚注3 : 「ジェームズ教授の情動理論」、Mind, p. 78, 1894

原脚注4 : 「ジェームズの心理学における問題点」II 情動。 The Monist, vol. III, p. 285 (1893)

のだと言うであろう。しかしジェームズ教授によれば、我々がクマに喰われることを好まないのは、逃げるからだ、というのである」(287)。

心理学における連合の力を思い出してもらえれば、これらの異議に対する回答はごく容易である。「対象」はたしかに、本能的反射運動を喚起するもっとも基本的な (primitive) ものである。しかし経験量が増えてくると、対象は「状況 (situation)」全体の構成要素 (elements) になってしまう<sup>(原脚注<sup>5</sup>)</sup>。そしてその状況を示唆する他の要素 (suggestions) の中には、まったく異なった運動を促進するものがあるだろう。一個の対象が慣れ親しまれてこのように (他の対象と一緒にになって何か別のものを：訳補) 示唆するようになると、情動の理論とは関わりなしに、その対象が単独で引き起こす結果ではなく、その対象が指示する状況全体の結果として、情動が生じることになる。しかし、ある状況において生じるわれわれの反応がどのようなものであれ、命に関わるような場合に我々を動かすのは、その状況における要素のうち、当面最も重要な一つの対象に対して生じる本能的反応である。同一のクマであっても、そのクマが自分を殺すのであるか、あるいは自分がクマを殺すのであるかというどちらの「観念」をクマが示唆するかによって、闘争を生じさせたり逃走を生じさせたりすることになるのは確かにその通りである。しかしどちらの場合であっても、問題はそのまま残っている。その観念に後続する情動的興奮はその観念に直接後続するのであるか、あるいは喚起された衝動 (impulse) の「波及的拡散 (diffusive wave)」の結果として二次的に生じるのかという問題である。

ウスター博士は、行為は、行為が喚起した意識によって情動を構成するという考え方を馬鹿げたものと見なしている。それで博士は、随意的行為の場合にはどうなるのかと問う。「夕立が来そうなので雨宿りの場所を探して逃げ込む。このときの情動は、程度こそ弱いであろうが、クマから逃げようとする人の場

---

原脚注5：私の言葉の使用法によれば、人に反応を生じさせる「対象」とは状況全体のことである。

合とまさに同一のものである。ジェームズ教授によれば、逃げるから濡れたくないのだということになる。逃げるかわりに店に入って傘を買うと考えよう。この場合にも情動は変わらない。つまり濡れたくないということだ。そうするとこの場合には、恐怖の所在は傘を買う行為にある。同様に食料を買いだめすると飢えに対する恐怖が生じる、日給わずか1ドルで土掘りの仕事をすると貧乏への恐れが生じる、等々、枚挙にいとまがない。怒りも、人を殴るという行為以外のさまざまな行為と関連している。（「ベニスの商人の」：訳補）シャイロックはアントニオの侮辱に対して怒りを感じ、その結果、アントニオに金を貸すことにした。怒りの所在は（中略）金を貸す行為の中であろうか。（291）」このような異議が出たのは、すべて私の言葉使いに足りないところがあったせいであろうから、「われわれは逃走する（run）から恐ろしいのである」と教科書に書いたのはよい例ではなかったことを認めよう。そこで、「逃走する」という言葉を私が本来用いたかった意味で、つまり、我々に生じる様々な運動、とりわけ、もっとも重要である目に見えない内臓の運動を指し示すために使うことにしよう。また、ひとつの名前しか与えられていない情動のさまざまな段階を区別することにしよう。そうすれば、わたしの理論はまた力を取り戻すことができるだろう。雨に濡れたくないという「恐怖（fear）」はクマに対する恐怖と同一の恐怖ではない。雨に濡れるのが怖いのは、濡れると不快であるとか、服が台なしになってしまうという予見による。このような予見は、意図的に走り出すとか傘を買うとかいう行動を促進するだろうが、情動的興奮と言えるものの喚起はごくわずかである。このような場合、恐怖は、それがどのようなものであるにせよ、意志的行為によって作り出されるものではない<sup>（原脚注6）</sup>。具体的な場面を形成する細部がなければ、生じる恐怖が不快な感覚の単なる観念（ideal vision）であるのか、それともさらに進んで内臓の反射的变化の感

---

原脚注6：このような場合、実際に走り出したとすると、呼吸や脈拍のせいで高揚感が生まれはするが、恐怖は生まれない

覚を生じるものであるのかはわからない。しかしどちらの場合にせよ、私の理論はすべての事実を説明することができる。

ウスター博士にせよアイアンズ氏にせよ、どの（同一名称で呼ばれる：訳補）情動であってもその徴候に多様性があることをよく知っておられる。そして、その情動のほうは変わらないのだから、一定していない情動の徴候が（同一の：訳補）情動の原因になるはずはないと考えておられる。ウスター博士は、いかなる情動であってもその強度が増してくると、付随する行為はみな似てくることをよく知っておられる。人は歓喜の極みに泣き、恐怖その他と同様に希望の場合にも、その極みには蒼白となって体が震える。しかし、もしもそれぞれの感情の知的背景（intellectual contexts）が異なっていることを別にして、感情それ自体のみを考えた場合、その感情のほうも、互いに似てはこないだろうか、というのが私の考えである。私の理論によれば、感情はそのように似てくるはずである。私自身の極度に強い情動体験の記憶は、このような見解を否定するのではなく、肯定しているように思われる。

レーマン博士（訳注5）の立派な著作である「人間の感情生活の主要原理（Die Hauptgesetze des menschlichen Gefühlslebens）」<sup>（原脚注7）</sup>の中に、ランゲの理論について詳しい紹介がある。そしてとりわけ、身体組織の徴候が様々に異なるのに情動のほうは全く異ならないという例の主張は、私やランゲの理論とは相容れない事実であるという印象を批評家達に与えているように思う。もし身体の症候が情動を作るのであれば、身体の徴候が異なれば、情動も異なるはずである。一方、もしも情動の中心に第一次の（primary）心的感覚を据えるとすれば、徴候が変動しても情動が不変であることは、理解するのが困難ではない（p.120）。しかし、身体の徴候が変動すると心的状態にもなにがしかの変化が生じることをレーマン博士は認めておられる。ただしレーマン博士は、我々の気分<sup>（訳注6）</sup>に心的原因が認められる場合、つまり「動機のある

---

原脚注7：Leipzig, 1892.

(motived)」情動の場合にはこの変化の程度は小さく、それに対して毒物（アルコール、ハシッシ、阿片）や脳の病変によって生じる場合のように「動機のない」場合には変化が大きく、血管系の運動その他の身体組織の状態が反対方向に変化すると、それに従って情動のほうもそちらに向かって変化すると述べている。私の考えでは、レーマン博士の主張はランゲと私の理論にとって致命的なものではない。なぜなら情動の主観的変動とはいったい何であるかということについて、我々が全く無知であるからだ。内観的観察にせよ身体の徴候の観察にせよ、もっと精密に観察すれば、「動機のある」情動の場合においても、この理論が予想する（主観的な：訳補）変動の量が示される可能性がある。

アイアンズ氏の私に対する批判は、同一の情動の身体徴候が人によって異なるのに、その（多様な：訳補）身体徴候が（同一の：訳補）情動の原因であると言うのは自己矛盾であるというものである。なぜならその場合には、明確な情動というものは何一つ存在することができなくなるので、そうすると一体何が、怒りとか恐怖という概念にまとまりを与えているのかというのである（82）。これに対する当然の回答は、身体の変動には限界があるから、それぞれの人の怒りや恐怖の身体徴候がいかに多様ではあるにせよ、なお、同一の名称で呼ぶことができるほどには機能の面で十分な類似性を保っているのだ、ということである。確かに、「統一的実在 (entitative)」という意味では「怒り」という明確な感情 (affection) など存在しない。

心の知的な状態も、また情動的な状態も、つまり対象の認識もまたその対象が原因となって生じる情動も、たしかに両者はかけ離れてはいるが、類似した神経の諸過程によって、すなわち末梢からの流れ込み (currents) によって生じるのだということを、アイアンズ氏はなかなか認めようとしなない。彼の疑問はこうである。「(ジェームズの言う内臓の変化の知覚は：訳補) それ自体が一つの知覚的過程であるというのに、それとは別の知覚過程が持つ冷たい知的性質を、情動の暖かみで満たすなどということが一体どうしてできるのであろう

か？（中略）また、もしも知覚がこのような暖かみを持ちうるのであれば、それはどうして内臓組織の混乱の知覚のみに限定されるのだろうか？（85）」と。私の答えはまず、それは少しも限定的なものではありません、なぜならあらゆる高次の官能的感覚（senses）は、「審美的」対象によって刺激されるときには暖かみを持つからです、ということである。次いで、たとえ二次的に喚起された内臓の変化（secondarily aroused visceral thrills）のみが暖かみをもつ対象（objects）であったとしても、私にはそれを事実として受け入れるのに何の困難もない。アイアンズ氏はさらに、心の感受的（receptive）状態と反動的（reactive）状態との間の決定的な違いを非常に強調して、ここで議論の対象となっている私の理論はこの区別をまったく無視しているという。ここで問題となっている（感受的過程と反動的過程の、身体の：訳補）内部における際だった違い（the inner contrast）について、彼はすばらしい説明を与えている。彼は自己が対象に対して起こす諸反応の包括的類（the whole class）に対して「感覚－態度（feeling-attitude）」という名前を与え、我々が情動と呼んでいる諸体験はその類における一つの種（species）であるとする。彼はこの感覚－態度と、単なる快と苦痛（plasure and pain）とをはっきりと区別する。この区別には私もまったく賛成である。感覚－態度の方向が自己から外部に向かっているのに対し、単なる快と苦痛の方向は（そして知覚と概念化作用（ideation）の方向も）対象物から自己に向かっている、と彼は述べている。対象に向かって快や苦痛を感じることは不可能である。そして、日常言語においても、苦痛を与えられることと、その結果として（苦痛のもととなっている：訳補）人物に対して悪感情を抱くこととは、はっきりと区別されている。このような感覚的態度（attitudes of feeling）はほとんど無限に存在するのだが、そのうちの幾つかは、認識と行為との間に必ず介在しているに違いない。そしてそのような場合には、われわれは自分の全存在が（our whole Being）動かされていると感じる（93-96）。もちろん、意識の内部にはこのよ

うに非常にはっきりとした（自己の状態の認識と、それを起こさせた外的対象とを区別するという方向の：訳補）違い（contrast）があるはずだから、その可能性と矛盾するような情動の生理学的説明は成り立たないということは受け入れるざるをえない。しかし、いったいいかなる根拠があって、内臓と筋肉が持つ感受性（sensibility）は（流れ込みであるので：訳補）自己から外部に向かう方向性（the direction from the self outwards）を持つことはできません、と言えるのだろうか？確かに、高次の官能的感覚（the higher sense）（広義には、その概念化作用の結果として生じるもの（sequelæ）も含まれる）のほうは、対象から自己への方向性（the direction from the object to the self）を受け持っているのだが。確かに、われわれは自然な類推に従って、意識における前者の（自己から外部への：訳補）方向性は外に向かう神経の流れによって媒介されているはずであり、後者の（外部から自己への：訳補）方向性は、流れ込んでくるほうの神経の流れによって媒介されているはずであると考える（フーリエ（訳注6）は観念の力（Idées-forces）に関する彼の著作の中でそのように主張し続けているし、またラッド（訳注7）も彼の最近の心理学書の中でそのような示唆をしているように思われる）。しかしこの類推は根拠のない空想ではないのか。このような空想を反省してみれば、そのような神経の流れが引き起こすことができる、あるいはできないものが何であるかについての知識には、何の根拠もないことがわかる。我々は、心と身体の関係（psycho-physic relation）についてほとんど何も知らないことは確かであるから、「身体における二種類の流れの方向がよく似ているのであれば、その結果としてそんなに大きな内的な違い（contrast）が生じるはずがない」と主張することはできないのである。

ウスター博士もアイアンズ氏も、身体的混乱の意識は、それ自体としては、そしてまた混乱を喚起している対象に関する意識とは切り離して考えれば、すこしも情動的ではないという事実を力説している。ウスター博士は、「声を立

てて笑うのもすすり泣くのも、これらは呼吸器筋肉のけいれん性の運動であって、しゃっくりとそれほど異なるものではない。前二者の意識が通常強い情動の興奮として感じられるのに、後者にあってはなぜそうでないのかということに、うまい説明は見つからない。(中略) 寒さに震えるのは強い恐怖の場合に生じると同種の運動であるが、少しも恐ろしさは感じられない。子どもや感受性の強い人の場合、皮膚をくすぐると声を立てて笑うが、これは必ずしも陽気な感情を伴わない。嘔吐行為は非常に極端な嫌悪に伴って現れることがあるが、そのような情動が少しもない場合にも生じる (289)」と書いている。その事実はもちろん認めねばならないが、挙げられているどの場合も、身体組織の変化が単なる局所的な身体的知覚を生じる場合であって、情動の拡散的な波の再現が完全になされている例は一つもない。これに対して、場所を特定することが難しい内臓のほうは例としてあげられていないが、こちらのほうがはるかに重要な身体変化である。内向きの原因 (inward cause) による身体変化が付け加えられる場合に我々は情動を体験する (have) のであり、そうであるからこそ、人は対象なくして、あるいは病的に、恐怖、悲嘆、激怒によってとらえられるのだと、私は主張してきた。しかしアイアンズ氏はこの解釈を認めようとしない。彼によれば身体の徴候は、感じられるとしても、それが情動を構成するのではない。(しかし：訳補) 恐怖の場合、身体の徴候こそが恐れを感じる対象をつくりあげているのである。我々がそれら (身体の徴候：訳補) を恐れるのは、身体の徴候に引き続いて未知の、あるいは特定することのできない悪いことが生じるからである。アイアンズ氏の示唆によれば、病的な憤怒 (rage) の場合、身体の運動はおそらく内側にある真の憤怒の表出ではなく、なんらかの内側の苦痛を取り除こうとする必死の試みであって、それが観察者にとって外見上は憤怒に見えるのだという (80)。この解釈は独創的なものであるが、どちらをとるかは読者の判断にまかせたいと思う。私の正直な気持ち

は、アイアンズ氏の解釈で私が自説を変えることはないということである(原脚注8)。

アイアンズ氏もヴント氏も、私のこの理論には哲学的に見て疑問のある主張がいくつもあると考えている。(そしておそらくはボールドウィン氏(訳注8)もサリー氏も(訳注9)、この議論の対象となっている理論を受け入れていないと思うが、私がいま論文を書いている場所では彼らの著作を見ることができないので、この私の印象が正しいかどうかはわからない。)例えばアイアンズ氏は、私の理論は、自己を無視し、その統一性を無視しているために、感覚(feeling)とは無縁の心理学理論になっていると言う(92)。しかし私は、この理論にはそのような一般的な哲学的主張はないと思っている。私の理論が仮定しているのは(おそらく誰でもが仮定することであろうが)情動の神経的諸中枢の中にはなんらかの処理過程(process)があるに違いないということであり、また、私の理論は、その過程は上行性の流れによってできていると単に定義しているだけだということである。つまり何か一般性のある理論に基づいているのではなく、ただ内観による見かけによればそうなると言っているだけ

---

原脚注8：アイアンズ氏は他所でこう述べている。「突然に提示された対象は強い恐怖を生み出すことがある。それが見慣れたものだとわかると、恐怖感は即座に消える。そして心的な気分のほうは変化してしまうけれど、身体の変化のほうはかなり長い間、以前の状態のままである」(86)。身体変化が消えていく過程は確かにしばらくのあいだ続くのであるが、しかし情動のほうは「即座に消滅」してしまうだろうか？これに対する私の答えは、その場合は非常に複雑な情動状態であって、去りつつある恐怖とやってくる安堵の喜びとが混ざったものであるということである。悪夢から目覚めようとしている状態は、我々文明社会に住んでいる者がしばしば体験する好例であろう。このような時、私の場合は、恐怖感は胸部および全身の筋肉、とりわけ脚部の筋肉中に感じられる、非常に強いけれどもなんとも記述しがたい感覚であって、まるで、筋肉が強く興奮しすぎたことになるか、さもなければ内側に向かって分解していくような感じがする。この感覚はゆっくりと消えていくが、完全になくなるまでは恐怖感が残る。この不快な体験が夢であり、恐怖感が減少しているということを知って、不完全とは言え安堵を感じているという事実があるにもかかわらず、そうである。もちろん個人差が大きいであろうから、この種の体験を多くの人々にぜひ観察していただきたいものである。

である。

心理学者は、知覚 (perception) が我々に教えてくれる対象の諸性質 (objective qualities) は、官能的感覚 (sensation) の諸結果であると考えている。これらの性質が我々に快または不快をもたらす時、我々は官能的感覚 (sensations) には「感情 (feeling) の色あいがある」と言う。この色あいが、マーシャル氏 (訳注10) をはじめとする人々が考えるように、官能的感覚の神経における過程を単に表しているだけ (a mere form of the process in the nerve of sense) であるのか、それとも他の人々 (例えばニコルス博士 (訳注11)) が述べているように、他に特別な神経があるからなのかということは、重要な問題ではない。快と不快とは、ひとたび存在するときには、認識された質 (the sensible quality) それ自体の中に、なんの媒介もなしに本来的にそなわっているように思われる。快と不快とは我々の意識の中でよくかき混ぜられている。しかし (意識: 訳補) 内容のこの快あるいは苦痛に加えて、それはかならず上行性の流れによって生じるものであると思われるのだが、我々は非限定的な興奮の生起 (a general seizure of excitement) をも感じる。これは、ヴント、レーマン、その他のドイツの研究者がアフェクト (Affect) と呼ぶものであり、また、私がずっと情動という言葉をあててきたものことである。このような興奮の生起を構成する心的内容 (the mind-stuff) を発見しようと試みるとすれば、私にとっては、それは付加的な感覚 (sensations) であって、その感覚を記述しようとするかなり難しいが、簡単に識別することができる、また身体組織の様々な部位に起源を求めることができるものであるように思えるのだ。これらの感覚 (sensations) に付け加えられるのは、「外的対象に関する意識内容」 (objective content) (判断された要素と判断とを含めるために、広くとらえている) と、その内容を色づけしている何らかの心地よさ、または心地悪さだけであり、他には何ものの存在も認めることができな

い(原脚注9)。

このような身体組織の感覚 (sensations) も、おそらくは内への流れこみに  
よって生じるのであり、その結果は、私にとっては、私の意識全体が (その内  
的な違い (inner contrasts) がどのようなものであるにせよ) これらの感覚  
によって媒介されているように見える。これが私の「理論」の全容であって、  
それはごく控えめな理論であると、私は理解している。

結局、私の理論と私の理論を批判する人々の見解との違いは大したことがないのかもしれない。ヴントは身体器官の変化によって生じる第3の感情の存在を認めているが、これは我々が「アフェクト」を持つ以前に、第1次、第2次の感情 (feelings) と融合しているはずである。またレーマン氏は、「事実による限り、我々は身体器官の諸感覚 (sensations) と、それらに結びついた感

---

原脚注 9 : この心地悪さ等々はごく弱い感情 (affection) である。いわゆる局所的な身体の苦痛を除き、外的対象に関する意識内容 (objective content) の場合には、それ自体は強くもなければしつこくもない。苦痛の場合、その感覚 (feeling) は二次的情動の興奮とは無関係に、強度の面でそれ自体が圧倒的に強力である。しかしこの場合においても、痛みの固有な性質の第一次的な意識と、耐え難さの程度の意識とを区別する必要があると思う。後者は第二次的なものであって、身体の反射器官の放射 (reflex organic irradiations) と関係しているように思える。最近私はちょっとした手術を受ける経験をしたが、真に耐え難いのは痛みの単なる大きさではないという事実を改めて認識することができた。もしも痛みが純正 (honest) かつ有限 (definite) で位置の特定ができる場合には、その痛みが非常に強かったとしても、極度の忍耐がなくても我慢できるだろう。しかし、痛みそれ自体は弱く小さいのに、有害かつ不自然な感じがするために、長く続いても我慢できるとはとても考えられない痛みもある。体全体がそのような痛みを拒否するのである。このような痛みがあると、無意識のうちに怯え、苦悶、吐き気、めまい、恐怖感が生じる。痛みそれ自体に付け加えられるこのような情動に対してあてはまる適切な名称は、英語にはない。ミュンスターバーグ教授 (訳注12) は 痛み (Schmerz) を意識の原初的「内容物」として、また 嫌悪 (Unlust) をそれによって喚起された屈曲筋の反応によるものとして区別している。また、彼のエッセイが出版される以前に、私は D.S. ミラー 博士と ニコルス博士が会話の中で、痛くてつらい (painfulness) のが「我慢できない (intolerability)」のは、痛みを起こす対象が呼び起こす反射的放射のせいであると云っているのを聞いた記憶がある。このように、もっともおだやかな感情的過程 (Gemütsvorgänge) であっても、私の理論の枠内に収まることになる。

情的色彩 (tones of feeling) とが情動において決定的なかかわりを持つことを認めざるを得ない (「情動の重要な意味」 wesentliche Bedeutung für die Affecte”) (p.115)」と述べている。ラッド教授もまた、情動の「強烈な」性質は情動にかかわる身体器官活動の余波に由来すると認めている。つまりここまででは皆が同意しているのであり、また、ウスター博士の言葉を借りれば、攻撃にさらされているこの理論が「重要な真実をふくんでいる」こと、またこの理論の提唱者たちが「心理学に対して立派な貢献をしてきた」こと (p.295) は承認されていると考えてもよいだろう。だとすれば、一体どうしてこのような強硬な異論があるのか？ この理論の批判者たちがこの理論は彼らの意識と矛盾している (ウスター, p.288) という場合、それは、内への流れ込み (incoming currents) によって生み出すことが心理-生理学的に不可能である情動的興奮の一部について、彼らには内観によって知ることができると言うのであろうか？ それとも単に、内観によって身体中に場所を特定することができる部分はごく少ないために、それが抽出 (abstracted) された場合でも、なお大量の情動が場所を特定できないままに残っているということなのであろうか。アイアン氏はこの2つのうちの前者について述べているが、選ぶべきなのは穏健な後者のほうであろう。そして当然のことであるが、だれしもが自分の意識にこだわるものである。私自身は、情動状態における身体諸器官の興奮のそれぞれの要素の場所を特定するという能力において、大きな個人差があることを決して否定しない。それどころか、第一次の感情的トーン (Gefühlston) の弁別力には大きな個人差があることはよく知っている。自分自身について言えば、身体において場所を特定することがうまくできないような感情は、ごく弱い、いわばプラトニックな事柄であると言わねばならない。そのような身体性を欠いた感情は、「あいまいな (subtler)」情動として理論的に存在しうるとは認めるが、それらは特定の感覚 (sensations)、イメージ、思考過程につきものの、心地の良さ悪さとして存在するだけであって、明瞭な身体器官の興

奮は生じてない。(原脚注10)

これが事実であるとすれば、問題は言葉の問題になってしまったと言ってもよい。「情動」という言葉はどんな種類の感情(feeling)に対して適切であるのか?興奮に強烈な混乱という性質を与える身体器官の感情(feeling)に対して適切なのか、それとも対象に対して生じる第一次的な快不快に適切であるのか、それともまた混乱とも興奮とも無縁の、思考における快不快に対してであるのか?私自身は議論の余地なく当然に、「情動」という言葉は興奮の強烈な感覚(feeling)のことを意味していると、またそれぞれの特殊な情動はそれぞれの特殊な興奮の感覚(feelings)に対してつけられた名前であると、そして興奮が取り除かれた後に残るかもしれない弱い感情(feelings)の名前ではないと考えている。しかし、この仮定においては、私は他の人々の意見を考慮しなかったように思う。

ウスター博士が論文の最後で行っている私に対する批判は、つとめて言葉の問題になっている。彼によれば、すべての快と苦痛とは、それが第1次的であり、高次の官能的感覚や知的作用による産物の性質を持ってしようと、あるいは第2次的であって身体的なものであろうと、みな「情動」と呼ぶべきものである(296)<sup>(原脚注11)</sup>。観念の中で想起された快や苦痛は、現前する官能的な快・

---

原脚注10: アイアン氏は、情動の「あいまいな」ものを容認するとすれば、それは私が理論のすべてを放棄することになるのだと主張している(88, 89)。またレーマン博士は(彼が言うにはランゲと私に反論するために)精緻な議論を展開し、第一次的感情(feeling)はいかなる感覚(sensation)にも付随しうるものとして、その実在を認めるべきであることを明らかにしようとしている(§§157-164)。このような反論は、私が理解する限り、私自身の理論とは何の関係もない空想的な理論に対して行われた全く的はずれの議論(ignoratio elenchi)である。私が主張したことといえば、情動発作(emotional seizure)つまりアフェクトが内への流れ込みに依存しているということだけである。

原脚注11: 「情動の本質は快と苦痛である」と彼は付け加えている。これは心理学において言い古された学説ではあるが、情動の存在場所の理論としては科学の価値を損ねる虚偽の中でもっとも不自然かつ術学的なものの一つであるように、私には思える。それならば虹の色の本質は快と苦痛であると言うことさえできる。なぜなら、さまざまな情動的興奮の中には無限の濃淡と色調があって、それらはみな、色の感覚(sensation)がそうであるように区別が可能であり、快であるか苦痛であるかを定めることが非常に難しいからである。

苦痛とは区別されるものであるが、「言葉の通常の使用においては」情動であると言ってよい(297)。そして彼はよい例を幾つか挙げている。

「私が嘔吐を催しそうな味の薬物を服用し、そのために顔をしかめているとしよう。私が思うには、誰一人として、心地の悪さは不快な味のせいであり、顔つきがゆがんでいるからだとは考えない。さて私はこの薬物を何度も飲まねばならないのだと仮定しよう。その場合、私の顔つきは、味を予期して、私のはじめてその薬物を飲んだときの顔つきとよく似た表情になるだろう。どうしてそうなるのだろうか？もし私が自分の意識を信頼することができるならば、それは、まざまざと思い出される不快な味覚の記憶それ自体が、不快だからである。(中略)もしもこれが事実であるならば、不快な味覚の記憶が、最初の不快な感覚によって引き起こされた運動と同種の連合された運動を喚起するのだと考えても、少しも不思議ではないのではなからうか？私には、最初にこの薬物を飲んだときに生じた不快感が、それを飲んだときに生じた不随意運動のせいであったということは信じられないが、この薬物を再び服用することに対する私の嫌悪感(repugnance)もまた、不随意的運動が生じているせいであるなどとは、それにもまして信じられない。(中略)自分自身の意識がはっきりしている人であれば、オレンジの味が好きなのはそれを食べたときに笑ってしまうからだとは言わないだろうと信じている。その人物がオレンジを好むのは味がよいからであり、オレンジがなくて残念な思いをする場合も、同様の理由による。(上掲書)」

さて、ウスター博士の事実に関する記述を受け入れてみても、彼が選んだこの例においてはいずれにせよ、吐き気と快感とはどちらも神経の内への流れ込み(incoming nerve-currents)によって生じるのであり、また、不随意的運動の感覚も同様であることにすぐに気づく。従ってこれらの諸現象をどのような名称で呼ぶにせよ、それらはともかくも私の理論の枠組みの中に入っている。残された唯一の問題は、「嫌悪感」と「好む」という単語が覆い隠しているこ

とがらである。これらの単語をイタリックにした（訳文中では下線：訳者）のは私であり、ウスター博士が例を挙げるにあたってこれらを強調したわけではない。これらは第3の感情（affection）であって、上行性の流れ（afferent currents）によって生じるのではなくて、味覚に関する感覚と反応との間にしかるべく置かれるものであろうか？それともこれらは、慎重に考慮すれば、実はごく繊細な反応であることがわかるようなものにつけられた名前ということなのであろうか？私自身は、後者のほうが正しいように思うのだが、わが批判者の論文のこころ（animus）を読みとるならば、好き嫌いというものは、内への流れ込み（incoming currents）によらない第3の感情であるというだけでなく、また、心の「情動的」状態における固有の要素（distinctive elements）を形成しているという見解を彼が持っていると考えざるを得ない。

議論の中心部が近づいてきた。「情動」という言葉がどちらの要素に属するかを決めるという辞書編集の仕事からはなれることにしよう。なぜなら我々の関心は事実に対する関心であり、そして何が事実であるかということは、今や非常に明白であるからだ。対象物に固有の感覚的色調（feeling-tone）とも、また、喚起された反応に固有の感覚的色調とも異なっている何かがあって、（名称はどうであれ）それが心の情動的状態においてひとつの重要な要素—上述の「好き」や「不快感」がその要素の典型であるが、別の場合には別の名称が見つかるかもしれない—であること（つまりウスター博士の主張であるとジェームズがここで書いていること：訳注）を認めねばならないのだろうか？そのような要素が存在し、しかも相当の量で存在（in vital amount）するという信念が疑いもなく、（ランゲとジェームズによって提案された：訳補）理論を拒否する人々すべての心の中に存在することは、明らかである。ウスター博士は内観が人によって異なっているためにこれ以上進むことができないのが残念である（288）とし、より客観的な判断基準が必要であると述べているが、これはまったくその通りである。しかしそのような判断基準を見いだすことができ

るだろうか？私は、そのような基準はすでに見いだされているということを示し、また、完全麻酔薬（complete anaesthetics：訳注14）に関するソイエ博士（訳注15）の最近の知見について述べたいと思う。ソイエ博士の観察によれば、少なくともある種の人々の場合には、ウスター博士が考えているような第3の心的要素が存在するかもしれないけれど、もし存在するとしても、まったく取るにたりない量でしかない。

私の最初の論文で、私は全身的知覚麻痺（generalized anaesthesia）の症例を持ち出し、もしも内側も外側も無感覚であるにもかかわらず情動を体験する患者が一人でも見つければ、私の理論は覆ることになることを認めた。当時、論文執筆中に覚えのあった症例について引用し、見かけ上、それらの症例は私の理論とは対立することを認めた上で、患者が行う客観的反応と患者が持つ主観的感覚（subjective feeling）とを区別することによって、私の理論の救済を計った。それ以来、多くの全身的知覚麻痺の症例が公になったが、残念なことにそれらの患者は適切な観点からの問診を受けていなかった。この有名な「理論」は、報告を書いた医師達には知られていなかったのである。しかしながら、ボルチモアのパークレイ博士（訳注16）による2つの症例<sup>（原脚注12）</sup>は、ウスター博士の反論の中で「価値のあるもの」として引用されている（294）。一人目の患者はイギリス人の女性で、痛覚、熱感、冷感、圧感と平衡感覚、それに嗅覚、味覚、視覚が完全に失われていた。触覚と位置の感覚は完全には失われていなかったが、ひどく損なわれており、聴力は少し残っていた。内臓感覚については、二年の間、飢餓感と渇水感が失われていたが、排泄の欲求は感じられていた。彼女は冗談を聞いて笑い、また、悲しみ、恥じらい、驚き、恐怖、嫌悪（repulsion）をはっきりと示している。パークレイ博士はウスター博士に次のように書き送っている。「この患者を観察した私自身の印象では、すべての精神的な情動的感受性（all mental emotional sensibilities）が存

---

原脚注12：Brain, Part IV, 1891.

在しており、無感覚ではない状態にくらべてほんの少々生気を欠いているだけで (only a little less vivid than in the unanæsthetic state)、また、情動は概ね自然であり、冷たいというところは少しもありません。」

第二の症例はロシア人女性で、皮膚の感受性を完全に失っており、また、筋肉の感受性もほぼ完全に失っていた。視覚、嗅覚、聴覚は保存されていたが、内臓感覚については言及がなかった（ウスター博士の引用による）。彼女は怒りと愉快の感情を示し、無感情な様子は全くなかった。

後者の場合はあきらかに報告が不十分で役に立たない。前者の場合、ある程度内臓と筋肉の感受性が残っていたことがわかるだろう。内臓と筋肉の感覚は情動において重要であると思われるので、彼女が情動を感じていた可能性は十分にある。しかしパークレィ博士は彼女の「無感情」について書いている。博士が、この患者の情動が「無感覚症でない状態にくらべると少々生気を欠いている」と考えていることがわかるだろう。

ソイエ博士の患者の無感覚はこれらの症例よりずっと完全であり、しかも情動が身体器官の感受性に依存しているかどうかをテストするというはっきりした目的で検査を受けていた。ソイエ博士はさらに、催眠暗示によって人為的に無感覚状態に置かれた2人についても、検査を行っている。自然発生した症例は44才の男性であったが、催眠の例はヒステリー性格の女性であった<sup>(原脚注13)</sup>。男性の無感覚状態はさらに悪化して、現在では皮膚と粘膜のすべての表面の感覚が全く失われているようである。筋肉の感覚は完全にない。空腹感・満腹感は存在しない。排便と排尿の欲求は感じられない。味覚と嗅覚はない。視覚はごく弱い。聴覚のみがほぼ正常である。皮膚と腱の反射を欠いている。顔つきには表情がない。言語は困難。全身の筋肉機構は半ば麻痺しており、身体の移動はほぼ不可能である。

---

原脚注13：「感受性と情動のラポルトに関する研究 (Recherches sur les Rapports de la Sensibilité et de l'Émotion)」と題された論文。Revue Philosophique の今年の3月号、vol. xxxvii, p. 241にある。

『この患者は、「わたしに心臓があることは知っています (know)。でもその鼓動は、たまにごく弱く感じる以外は感じません」と言う。それ [テキストから推測すると心臓のこと] に影響するような事柄が生じて、彼はそれを感じる事ができない。彼は自分自身が呼吸していることも感じておらず、吸気の強さ弱さもわからない。「私は自分が生きているということが感じられないのです」と彼は述べている。発病の当初、彼は自分が死んでいるものと何度も考えた。彼には自分が眠っているのか起きているのかもわからない。(中略) しばしば、思考がない。彼が何かについて考えるとすれば、それは彼の家庭であるか、あるいは彼が従軍した1870年の戦争である。彼のそばを歩き来する人々を見ても、彼は完全に無関心である。彼はそれらの人々が何をしているのかに気づいていない。彼によれば「彼らは私にとっては自然な人間には見えず、機械みたいに見えるのです」ということである。聴覚においても似たような知覚の混乱が見られる。「昔のようには聞こえないのです。耳の中では響いているような感じですが、頭には入ってこないのです。音は長く留まっています。」彼の注意欠如 (aprosexia) は完全なもので、どんなものに対しても興味を持つことができない。なにものも彼に快を与えることはできない。「私は何に対しても何も感じないのです。私の関心を引くものはありません。私には好きな人はいませんが、嫌いな人もいません。」彼には、回復することが快であるかどうかということすらわからない。私が彼に治癒の可能性があると告げたときにも、なんの反応もなかった。驚きや疑いの片鱗もなかった。彼の心を少しだけ動かすように思われるのは彼の妻が訪れたときである。彼女が部屋に入ってくると、「胃の中で何か動くようです」と彼は言う。「でも、妻が来るとすぐに、妻にはどこかに行きたくて欲しいと思うのです。」彼にはしばしば、彼の娘が死んでいるかもしれないという恐怖が生じる。(原文左カッコ欠：訳補) もしも娘が死ぬようなことがあれば、私も生きていることはできないでしょう。でも私が娘に二度と会えないとしても、そのことは私にとってどうでもよいこ

とです。」彼の視覚的イメージは持続性がないため、彼の妻がいないときはその表象はない。彼には弱い感覚しか残っていないので、何につけても不確実な感じしか持てない。「私はなににつけても、たしかにそうだ、ということがないので。」彼を驚かせたり、びっくりさせたりする事からは全くない。彼の無感情、無関心、極端な情動欠如の状態は、無感覚の症状と歩調をあわせて徐々に進行してきた。彼の症例は、従って、ウィリアム・ジェームズが望んできた実験を可能な限り完全に実現したものと言える。』

催眠の実験において、ソイエ博士は被験者に対して、内臓あるいは末梢、あるいは両方の無感覚を生じさせている。彼は可能な限り（呼吸計等によって）身体諸器官の活動を記録し、それを、まず無感覚状態において、次いで正常な状態において、情動を喚起する観念が提示された場合に生じる諸器官の活動と、同一被験者内で比較している。そして最後に、彼は被験者に対してどのような印象を受けたかを尋ねている。結果の細部については原論文を読むべきであるが、ここではもっとも重要と思われる結果のみに言及しよう。

- (1) 完全な末梢の無感覚によって運動の力は完全に消滅する。同時に四肢は冷たくなり、ときに青ざめる (247)。
- (2) 内臓の無感覚を加えると、被験者の女性は自分がもはや生きていないような気がすると答える (同)。
- (3) 完全に無感覚になると、被験者の女性は、幻覚や妄想の暗示によっても正常な情動を全く感じない。これらの暗示は感受性が戻っている場合には強く被験者の心を動かす力がある。無感覚が不完全な場合、被験者の女性は通常の情動は感じないけれども、心を動かすような観念が与えられると、頭や胃になんらかの動揺を感じると答えることがある (250, 254)。
- (4) 無感覚が末梢だけの場合、情動はほとんど正常な強さで生じる。
- (5) 無感覚が内臓だけの場合、情動は両方が無感覚の場合と動揺に失われるので、情動はもっぱら内臓感覚に依存している (258)。

(6) 興奮性の観念が提示された場合、内臓の無感覚条件では、呼吸計の記録にわずかな運動反応が生じることがある（図2と7の2）。しかしソイエ博士は（非常に思弁的な理由からであるが）完全な情動性欠如（inemotivity）では内臓の反応それ自体が生じないと考えている（265）。

読者はソイエ氏の実験結果が全体として、「私の理論」が必要としているよりもさらに先に進んでいることが分かるだろう。内臓感覚があれば「粗大な」ものだけでなく、「弱くてとらえにくい（subtler）」情動も生じる。内への流れ込み（incoming currents）に依存しないと仮定される（第3の：訳補）感情の量が、無視できるほど少ない人もいるのだという可能性は認めねばならない。もちろん、「暗示」という方法によって行われた実験に誤りがある可能性について心に留めておかねばならない。また、男性患者の情動性欠如が、神経の病変によって無感覚症と一緒に生じているものであり、無感覚の結果ではないかもしれないということも忘れてはならない。それでも、ソイエ氏のものと同様の症例が他の観察者によって多く見いだされるとするならば、ランゲ教授と私の理論が決して異端の説とされるのではなく、正統性のある学説になるかもしれないと私は考える。上行性の起源によらない情動的感觉については、もし存在するとしても、あまり重要ではないことが認められ、そして「情動」の名称はその状態に固有の特徴を持つ身体組織の興奮を指し示すものであることになればよいと思う。

ウィリアム・ジェームズ

ハーバード大学

訳注1：対象の印象は第一次の感覚である。この結果、（反射として）身体に変化が生じる。これが第一次の反応である。この反応は上行性の神経刺激を生じるから、それによって第二次の感覚が生じる。ジェームズは、情動の意識はこの第二次の感覚によって生じると言う。

訳注 2 : 直上の 2 つの文章で頻出する it, its は基本的にはヴントが言う第一次の感性的感覚 -primary Gefühl- のことを指していると読めるが、一番最後の its が指しているのは、ジェームズが言う「感情」つまり末梢の変化を検出した結果として現れる二次的感情であろう。

訳注 3 : アイアンズ氏

Irons, David (?-1907) スコットランド出身の哲学者、倫理学者。1894年にコーネル大学で Ph.D. を取得。Study in the Psychology of Ethics (1903) の著者。1901年には Bryn Mawr College の教員。1894年に “Prof. James’ theory of emotion” を発表 (Mind new serieese, Vol. 3, pp.77-97)。ジェームズの反論に対してさらに “The physical basis of emotion. A reply” で再反論している (Mind new serieese, Vol. 4, pp.92-99)。

訳注 4 : ウスター博士

Worcester, W.L. (生没年不詳)

PsycINFO による検索では 1894-1900 の間に “Three Cases of General Paralysis in Young Women” 等計 7 点の著作がある。精神医学、神経生理学が専門と思われる。

訳注 5 : レーマン博士

Lehmann, Alfred Georg Ludvig (1858-1921)

デンマークの心理学者。ヴントのもとで学び、その後コペンハーゲン大学に心理学実験室を立ち上げた。

訳注 6 : フーイエ

Fouillée, Alfred Jules mile (1838-1912)

フランスの哲学者。La Psychologie des idées-forces (1893)など、観念の力をテーマとした著作が多い。Mind誌 (new series) 2巻2号 (p.511-) に編集者のG.F.Stoutがこの書物について書評を書いている。フーイエによれば、観念の力とは分割のできない、感覚的、情動的、嗜好的な一つのプロセスであり、観念とは妨害または促進を受けた努力である。

訳注7：ラッド

Ladd, George Trumbull (1842-1921)

アメリカの哲学者、心理学者。オハイオ州出身。ドイツの哲学者ロッツェ (Lotze) の影響を強く受ける。1881年から1901年までイエール大学の形而上学の教授。イエール大学に心理学実験室を開設。1892年と1899年には日本でも講義。1893年のアメリカ心理学会会長。

訳注8：ボールドウィン氏

Baldwin, James Mark (1861-1934)

トロント大学に北アメリカにはじめての心理学実験室を設立。その後プリンストン大学を経てジョンズ・ホプキンス大学の教授。1897年のアメリカ心理学会会長。

訳注9：サリー氏

Sully, James (1842-1923)

イギリスの心理学者。1892年から1903年までロンドンのユニバーシティ・カレッジの教授。アレクサンダー・ベイン同様、連合主義の立場をとる。

訳注10：マーシャル氏

Marshall, Henry Rutgers (1852-1927)

ニューヨーク出身のアメリカの心理学者で建築家。快と苦痛を別のものではなく、連続体の二極と考えた。イエール、コロンビア、プリンストンの各大学で美学を講義。1907年のアメリカ心理学会会長。

訳注11：ニコルス博士

Nichols, Herbert (1852-1936)

1871年に Worcester Polytechnic Inst. でBSの学位。1891年にクラーク大学でPh.D.を取得。この年、ジェームズの新しい実験施設の助手として任命された。1892-1893までハーバードで心理学講師。なお、1906に、“Professor James's 'hole.’”という題名の記事を Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods という雑誌に書いている。

訳注12：ミュンスターバーグ教授

Münsterberg, Hugo (1863-1916)

ドイツ出身の心理学者。1885年にライプチヒ大学でD.Phil、1887年にハイデルベルク大学で医学博士。1892年にジェームズに呼ばれ29歳でハーバード大学実験心理学の教授（1897年まで）。1897年から1916年まで心理学の教授。1905年から1916年まで心理学実験室の責任者。1898年のアメリカ心理学会会長。

訳注13：ミラー博士

Miller, Dickinson Sergeant (1868-1963)

アメリカの哲学者。ペンシルバニア大学を1889年に卒業後、ハーバード大学で1892年に修士、翌1893年に Univ. of Halle-Wittenberg でD.Phil（哲学博士）。1894年から1899年まで Bryn Mawr College で哲学を教える。1899年か

ら1904年までハーバード大学で哲学の講師。その後コロンビア大学（1904-1919）。

訳注14：完全麻酔薬では痛みがなくなるだけでなく、睡眠状態（手術中の意識・記憶がない）、反射の低下、筋肉弛緩などが生じる。

訳注15：ソイエ博士

Sollier, Paul (1861-1933)

フランスの精神医学者、心理学者。

訳注16：ボルチモアのバークレイ博士

Berkley, Henry J. (生没年不詳)。ジョンズ・ホプキンス大学の精神医学の教授。1890-1925の間に多数の論文が出版されている。本文中で引用されている1891年の論文は、*Two cases of general cutaneous and sensory anaesthesia, without marked psychical implication*” Brain 14巻 pp.441-464。